

ドロリーング

久光真央

袴田 玲子 (34歳)

袴田 恒夫 (30歳)

袴田 こそえ (38歳)

袴田 晴彦 (28歳)

袴田 亮介 (40歳)

袴田 朝日 (19歳)

真柴 美夜 (64歳)

津川 夕子 (30歳)

紺野 真昼 (51歳)

相川 峰子 (28歳)

花園 守 (39歳)

富沢りりか (33歳)

寺西 真美 (27歳)

三笠 綾女 (35歳)

的場 直樹 (31歳)

里中樹絵莉 (19歳)

3分前、MO音楽

3分で曲が高まっていき、暗転。

曲ゆっくりフェードアウト。

【プロローグ】(サイレントシーン)

音楽

明かりゆっくり入る。

縁側に後ろ姿で座ってる女性①(美夜)

居間で寝ている女性②(玲子)

女性②が目を覚ます。

辺りを見回し、縁側の女性①の後ろ姿を見て微笑む。

傍らの机の上を片づけながら

縁側の女性①に何か話しかける。

応えない縁側の女性①に近づく。

女性②、しばらく女性①を見つめているが、やがて異変に気付く。
誰かをよぶ。

1

男性②(晴彦)と女性③(こずえ)がやってくる。

男性②は女性①に駆け寄り、声をかけ、揺り動かす。

男性③(恒夫)が入ってきて、それを見て立ちすくむ。

電話をかける女性②。

男性③、手にしていた紙を見つめながら崩れる。

明かりが薄明かりになっていく。

男性②、③、女性②、③ストップモーション。

女性①、ゆっくり立ちあがり微笑み、はけていく。

秋の虫の声。

一転して賑やかな音楽(キャスト紹介)

何かを書きながら、紙を散らかす登場人物たち。
額縁を持って踊りだす者たちが、

ひとりひとり、その額縁に、登場人物たちの顔をあてこんでいく。

その間に、登場人物たちにより小道具の細かい転換が行われていく。
秋から夏へと景色が変わっていく。

扇風機、風鈴、蚊取り線香、そして、庭には、ひまわり。

恒夫、玲子、サイレントシーンの終わりの立ち位置に戻る。

音楽カットアウト。

明かり変わる。

【場】ある夏の日。午後

蝉の声。

崩れてた男性、袴田恒夫(30歳)、
ペンをかきながら、手にしてた紙を破き、ぐしゃぐしゃにして
放り投げる。

2

電話を置く女性、袴田玲子(34歳)
恒夫を見て、ため息をつく。

玲子、散らばった紙を拾い集め、かたわらの机の上に置く。

庭先から声がする。

袴田亮介(40歳)が

袴田朝日(19歳)と共に

2人でひまわりを植えている。

玲子さん、見て「

はーっ」

可愛いでしょ」

はあ……」

「ママ」

はあ」

朝日
玲子
朝日
玲子
朝日
玲子
亮介
あれ？玲ちゃん、ヒマワリ好きじゃなかったっけ」

亮介、泥がついたまま、縁側から上がろうとする。

「あ」

亮介「あ？」

玲子「泥が」

亮介「ああ、いいって、こんくらい(上)がろうとして玲子に止められる」

玲子「玄関」

亮介「あ、ああ、玄関ね」

朝日「手も洗わなきゃね」

玲子「玄関」

亮介「夕オルは」

玲子「玄関」

亮介「やだ、玄関、なんでもある」

朝日「お父さん、ほら、行」

亮介「あ、玲ちゃん、麦茶いれといってくれるっ」

玲子「はい」

亮介「砂糖たっぷりね」

玲子「はい」

ここにしながら、玄関側に向かう亮介と朝日。

ずっと項垂れている恒夫。

電話がなる。

恒夫、玲子を見て首を振る。

玲子、再び、ため息をついて、電話に出る。

玲子

「はい、袴田です。」

あ、お世話になっております。はい、そうです。

えっええ、ただ今、絶賛、執筆中です。はい。

えっそりやもう、かなり筆がのっているっ。走っているっ。

はい、憑りつかれたみたいに、はい、はい。

×切っ……ですよねえ。はい、承知いたしております。

はい。ありがとうございます。はい。はい。はい。はい。

お待ちしております」

恒夫、最後の一言にびっくりしてうろたえる。

恒夫

「く、来るのっ……」

玲子

「原稿、何が何でも今日もぶっついで」

恒夫

「やめてやめて」

玲子　もう限界ですって「
恒夫　なんにも書けてない」
玲子　みたいね」
恒夫　書ける気もしない」
玲子　でも書かなきゃ」
恒夫　無理」
玲子　仕事でしょ？引き受けたのは自分でしょ？」

電話がなる。

恒夫、再び、玲子を見て首をふる。

玲子　あのね、もう私は「

恒夫、耳をふさいで、首をぶんぶんふる。

玲子、更に深いため息をついて電話に出る。

玲子　はい。袴田です。はい、袴田恒夫ですけど。……
えっ？はい……あの、どういことですか……っ？はい……はい……
そうですか……。いえ、はい、申し訳ありません。
わかりました。はい……はい……

電話をおく。

恒夫、玲子の様子をうかがう。

玲子、無言で奥の部屋に行く。

恒夫　え、ちよつと「

玲子、たくさんの枕を持ってきて

恒夫に投げつける。

玲子　又なのね、あんた、又なのね！「

恒夫　え？なに？また？なに？「

玲子　どうして、あんたは、いつもいつもいつも「

恒夫　『つも？また？なに？っ？どの又っ？どれのこっ？』

亮介と朝日が入ってくる。

朝日　え、なにになに？枕投げ？私もやるー（枕を投げる）「

亮介　あれ、玲ちゃん、麦茶は？「

玲子　台所！「

亮介　だよね（取りに行く）「

朝日　お父さん、私のも「

玲子 呆れた、ほんと呆れた」

恒夫 だから、どの事だか、言ってみよ」

玲子 心当たりがありすぎるのも問題なのよ」

朝日 なに？また？女？借金？ギャンブル？

恒おじちゃん、やるなあ」

玲子 何回、ため息、つかせんのよ」

亮介 ねえ(戻ってきて)あの麦茶、甘くないんだけど」

玲子 自分でいれてください」

亮介 あ、はい(戻る)」

玄関のチャイムの音。

とつさに枕をかぶる恒夫。

恒夫 「ないって言うって」

玲子 【無視する(」

朝日 編集さん？」

恒夫 きつきの電話は？誰？」

玲子 酒、女、ギャンブル、借金、さて、どれでしょう」

恒夫 どれだろう」

朝日 すこいね、これで暴力あったらクズのコンプリート」

恒夫 暴力はダメ。ポリシーなの」

玲子 花園金融さんですって。早く返してくださいって」

朝日 え、なんか、マイナーな金融会社の名前でちゃった。

大丈夫？それ、やばいとこじゃない？」

恒夫 今はこっちがやばい(玄関の様子をうかがう)」

玲子 じゃあ私はこれで」

朝日 え、おばちゃ…玲子さん、帰っちゃおうの？」

恒夫 やだ、帰らないですよ」

玲子 今日は離婚届けを渡しにきただけだから(置く)

朝日 明日、また来るわね」

朝日 泊まっていけばいいのに、明日朝早いんだし」

こずえ くださいまー！」

突然、顔を出す、袴田こずえ(38歳)

こずえ なにこの枕の上」

朝日 あー、こずえちゃんだ、おかえりなさい」

こずえ 欠しぶり、朝日。つねちゃん、玲ちゃんも」

玲子 おかえりなさい」

スーツケースを持って亮介も入ってくる。

亮介 「これ、ど」置く？」
こずえ 奥の部屋がいいかな
亮介 あいよ(持っていく)
こずえ あ、私も、お父さんに挨拶する」

こずえ、亮介に続いて奥の部屋に行く。
亮介、戻ってくる。

仏壇に置かれてる「ワン」の音。

亮介 すこいね、枕」
玲子 あ、今、片付けます、片付けたら帰ります」

こずえ、戻ってくる。

こずえ 聞いたわよ、玲ちゃん。別居してるんだって？

あ、麦茶もらえる？」

玲子 私、今、帰ると」で

こずえ お砂糖いれてね」

玲子 「……はい(枕を恒夫に渡して、台所に行く)

亮介 あ、玲ちゃん、俺にも」

玲子 「……甘い麦茶、人数分、お持ちします」

亮介 どうも」

こずえ はあ、やっぱり、実家はいいねえ」

恒夫 「こずえちゃん、来れないんじゃないの？」

こずえ うん、なんとか仕事の区切りついたからさ。

お父さんの「回忌くらい顔出したいもん」

亮介 早いな、もう6年経つんだもんね」

朝日 「7年じゃないの？」

亮介 「7回忌は6年目のことなんだよ」

こずえ 亡くなった年を1で数えるからね。

あれ、朝日、幾つになったん？」

朝日 「19歳だよ」

こずえ そっかあ。歳とるわけだわ」

亮介 お前、結婚は」

こずえ する気ないもん(茶筌筒をあさる、おせんべいを出す)

亮介 まだ、そんなこと言ってるの、あのな」

こずえ うるさいなあ、私の勝手でしょ」

亮介 そうだけど心配なの。まったく、お前も、つねちゃんも」

こずえ もーお兄ちゃん、お父さんにますます似てきたね」

亮介 そりゃ、俺は、お前らを立派に育てる義務があるからな」

こずえ むっいいじゃん、私、もうアラフォーだよ？

娘を立派に育てなって。あ、そうだよ、私、結婚しなくても、朝日がいるから、いいや「私？」

朝日
こずえ

「うん、私の老後も面倒みてね」

朝日
亮介

「どうしょ、お父さん1人も、結構大変なんだけどなあ」

朝日
こずえ

「なんだよ、そんなことないだろ」
「お父さん、家のこと、なんも出来ないじゃん」
「そうそう、大体ねー、」

朝日
亮介

「うちの男ども見てて、結婚に憧れるわけがないのよ」
「わかるわかる」

朝日
こずえ

「いや、お父さんだけは、ちゃんとしてるぞ」
「離婚されたくせにー」

朝日
こずえ

「うちの家系は男が捨てられる運命なのねえ」
「でも、こずえちゃんは、女だから」

朝日
こずえ

「いや、私、性格が男だし、ダメダメ。」
「家のこともなんにも出来ないもん。」

亮介
恒夫

「ま、結婚だけが人生じゃないってことですよ」
「でもなあ、つねちゃんも離婚っていうのはなあ」
「いてないから」

恒夫
こずえ

「どうなってんの、袴田ファミリー」
「でも、ほんこ、押さないつもりって言ってるよ」

朝日
玲子

「麦茶をもってくる(明日には押ししてもらいます」
「ね、明日、おばちゃんたちも来るの？」

玲子
こずえ

「どうだったかな」

恒夫
亮介

「やだ、連絡してないの？」
「坊さんは」

亮介
恒夫

「どうしたっけかな」

恒夫
亮介

「お寺さんにも連絡してありますし、
親戚の皆さんにも確認してあります。」
「お食事の手配もしてあります」

亮介
こずえ

「さすが玲ちゃん」
「ほんと、うちはさ、玲ちゃんいるからなんとか

玲子
こずえ

「やってこれたんだよね。ん？あれ？これ、甘くないよ？」
「麦茶は甘くない方が美味しいと思います」

玲子
こずえ

「えっうん、まあ、そうかもだけどね、でもさ、うちは」
「ずっと言いたかったんですけど、やっと言いますけれど、
麦茶に砂糖は体によくないです」

亮介
玲子

「そう？いや、夏の暑い時はさ」
「麦茶に砂糖は変です」

玲子
こずえ

「えーどうしたの、あれ、袴田家の味でしょ」
「おくあんな甘いもん飲めますよね」

亮介
玲子

「のままだと、苦い」

玲子 「それが麦茶です」

亮介 「けど」

玲子 「カロリーオーバーです」

亮介 「はい」

こずえ 「まあね、そうね、うん、これも美味しいしね」

玲子 「それに袴田家の味と違って言ってますけど、

袴田家の人、みんな、台所、立たないし」

恒夫 「茶筆筒から砂糖を出して、入れる、飲む」うん」

朝日 「…恒おじちゃん」

恒夫 「ん？お砂糖、いれる？」

朝日 「今の流れでよく…」

朝日 「わかります？こっとうとこっなんです、こっとうと」

玲子 「わかるわかる」

朝日 「結婚した当初は、周りを気にしないマイペースさが

頼もしく思えたんです。でも、間違えました。

玲子 「これ、単純に、周りに気遣いが無い。思いやりもない。

朝日 「ガマンが出来なくて、周りに合わせられないだけなんです。

玲子 「それだけじゃないです。

朝日 「楽天的でいいなって思ってたのも、単に、

玲子 「考えることがめんどくさいだけ。先延ばしにして

朝日 「誰かがやってくれるのを待ってるだけ」

8

玲子 「玄関のチャイムの音。

朝日 「恒夫、枕をかぶる。

玲子 「全員、玄関を意識するが、誰も動かない。

朝日 「そっでした、皆さんも、同じでした。

玲子 「いつとも、そうやって誰かがやってくれるのを待ってる。

朝日 「そうやって、ずっと、待ってればいいんですよ」

玲子 「玲子、立ちあがる。

朝日 「全員、なんとなく、ほっとする。

玲子 「袴田ファミリーの別名、知ってます？」

朝日 「全員、あれ、行かないの？」という顔をする。

玲子 「ほかまだ』です。ほ、バカまだ』ファミリーですよ？」

朝日 「玄関のチャイムの音。

朝日 「恒夫は、枕から出てこない。

朝日 「全員、お互いを促すように、小突きあう。」

玲子、玄関に行こうとして、立ち止まる。

玲子

なんで結婚しちゃったんだろう。
しかもなんで、ずるずる、十年以上も一緒にいるんだろう。
私の人生、なんなんだろう。
小説のお仕事だって、たまたま、そう、たまたま、
デビュー作が賞とったからって。その後、書けてないんですよ。
でも別にいいんですよ。働けばいいじゃないですか。
働かないなら、お金、使わなきゃいいですよ、
けど、遊ぶし、呑むし、打つし、
借金して、なんとかなるとかって言ってますよ。
その借金だって。誰が返してきたかわかります？」

その話の間に、庭先に人が入り込んでくる。
庭から家の中を見て微笑む、真柴美夜(64歳)。
やがて、植えてある「ママリをうっ」とり見つめている。
津川夕子(30歳)が、慌ててやってきて
美夜を介助するかのようになり、また、玄関の方に導く。
それを、朝日が見ている、固まる。

あ、ちょっと

ごうした？」

9

朝日
亮介
朝日
玲子

今…あれ？お客さん？(庭におりる)
ぞう、いざとなったら、嫁なんて客扱い。
結局、他人、みたいなこと言われながらお世話して。
いえ、お義父さんのお世話はいいんです、私も、
小さい頃からお義父さんにはお世話になったし、
看取れて本望」

玲子、喋りながら、奥の部屋に行く。

全員、後を追うように、覗きこむ。

仏壇の「カ」の音。

玲子、戻ってくる。

玲子

ほんとお父さんみたいに思ってたから！
袴田兄弟だって、小さい頃から、羨ましかったから！
お嫁に来て嬉しかったのに…あんたら、なんもしない。
昼も夜も、家でも外でも働かされてポロポロですよ。
それどころか、こいつ、一番のクズだった！
家のことはなにもしないし、その癖、
平気でなんでもかんでも拾ってくるし」

玲子、押し入れを開ける。
押し入れの中に、女がいる。相川峰子(28歳)。

玄関のチャイムの音。
さつきより激しく鳴る。

峰子、全員を見廻してから、自ら、襖を閉める。

亮介

え？え？」

朝日 なんかいだ(庭と押し入れ、どう処理していいかわからず)「
もう我慢の限界なんです」

玲子

そりゃそうでしょう」

亮介

えーと(押し入れと玄関を交互に見ながらオロオロする)「

玲子

「くら、私たちに子供がないからって」

こずえ

そーいう問題じゃないから」

亮介

「お前、昔からいろいろ拾ってきたけど」

玄関のチャイムの音。

亮介

「、これはどうなんだろうな、ちゃんと世話でき」

こずえ

そーいう問題じゃないよ、これは離婚だわ」

玄関のチャイムの音。

恒夫

離婚、しない、絶対」

朝日

逆に、なんでっ」

陽気に歌いながら現れる袴田晴彦(28歳)

一瞬、立ち止まり、また歌いながら奥の部屋に行く。

仏壇のリンの音。

亮介

晴彦？はるちゃんか？」

晴彦

「おお、兄貴たち、姉貴たち、そして姪っこ、ただいま。

今、帰ったよ」

はるちゃん、久しぶり、少し太った？」

最近、筋トレしてるからかな」

「いのか、ロックは筋トレしないんだろ？」

「けようちゃん、俺はロッカーだよ」

そっか、いや、座れ座れ」

亮介

晴彦

亮介

晴彦

こずえ

朝日、押し入れが気になり、そっと襖をあけて覗く。

晴彦

それからこずちゃん、久しぶりにあった人に

いきなり、太った？って言った？って言ったらいけないんだからね」

こずえ

はるちゃんも、親父の7回忌？」

晴彦

当たり前だろ」

恒夫

すごいね、7回忌パワー、みんな集まる」

亮介

じゃあ、さっきの玄関のチャイムも、はるちゃん？」

晴彦

あ、違う違う、忘れてた。すごいよ、なんか玄関、

大渋滞してるよ」

こずえ

え？」

晴彦

玄関の前だけ、誰かの出待ちみたいに、人だから。

何あれ、どうしたの？」

あ、麦茶、飲みたいな、これ、お砂糖入ってる？」

玲子、立ちあがる。

玲子

お砂糖入り麦茶は、セルフサービスになっております」

そう告げて、居間を出る。

晴彦

「こずえのコップを取り）わ、苦い。どうしたの？」

なんでお砂糖、入ってないの？」

峰子

はい、お砂糖（押し入れから出て来て、お砂糖を入れる）

晴彦

「・・・峰ちゃん？」

他、全員

は？」

峰子

おかえりなさい。ここにいたら、ハルに逢えるって聞いたから

晴彦

峰ちゃん、ずーっと待ってたんだよ」

晴彦

「すげー！サプライズ」

峰子

暗くて、狭かったけど、待ってたんだよ」

晴彦

可愛いことしてー」

亮介

えー、えっと」

こずえ

はるちゃん、この人、誰？」

晴彦

あ、紹介します。相川峰子ちゃんです」

こずえ

うん、その峰子ちゃんは、なんで押し入れに、

いや、誰に言われて押し入れに」

恒おじちゃん？」

亮介

つねちゃん？」

恒夫

うん」

亮介

あ、そう、ああ、そうか。じゃあ、良かった。玲ちゃん、

（奥の部屋に）これ、つねちゃんの女じゃないって」

朝日

ぞうという問題じゃ・・・あれ？そういう問題だったっけ」

こずえ

でも、なんで、つねちゃんが？」

恒夫

はるちゃんを待つって、玄関で寝ようとしたから、

こずえ
家に入れたら、いつの間にか押し入れに入ってたみたい
で?」

恒夫
それを、玲ちゃんに伝えるの、忘れちゃって
伝えなきゃ。大事だぞ、そういうの」

亮介
はい、伝えまーす。

晴彦
明日、親父の7回忌だしさ、報告します。
俺たち、結婚します」

恒夫
ええ?」

亮介・朝日
えええ?」

こずえ
ええええ?」

晴彦
ありがとうー」

峰子
赤ちゃんもいます」

晴彦
ねー」

峰子
ねー」

こずえ
ねーって、はるちゃん、

姉ちゃんたち、いろいろ追いついてないんだけど」

玄関のチャイムの音。

恒夫、枕で隠れる。

何故か、峰子も隠れる。

全員、玄関の方を見るが、誰も動かない。

「あれ、玲子は??どこに居るの?」みたいな顔。

仏壇の「カ」の音。

亮介
明日、あつちの狭い部屋でやんの?」

こずえ
法事の際は、いつもそうじゃん」

亮介
お寺さんにすれば良かったかなあ」

朝日
ねえねえ、あつちもこちもいろいろどうすんの?」

玄関のチャイムの音。

峰子
ハル、峰ちゃん、疲れちゃった」

晴彦
大丈夫? あつちの部屋にお布団しこうか?」

峰子
〔押し入れに入る〕少し、横になってるね」

こずえ
ちよっと、そんなとこで大丈夫なの?」

峰子
うん。快適にしてあるから」

晴彦
ひとりで大丈夫?」

峰子
大丈夫。ハルは、久しぶりに家族団欒して」

峰子、押し入れの襖を閉める。

玄関のチャイムの音。

玲子、奥の部屋から出て来て、
全員を見る。

無言で玄関に向かう。

一同、何事もなかったように、

亮介

はるちゃんが結婚かあ」

こずえ

つねちゃんが離婚なのにねえ」

晴彦

え、つね兄、離婚すんの？」

恒夫

「枕をかぶったまま」はんこ押してないもん」

玲子(声)

え?!あの、ちよっと、すみません、困ります。

あの、せめて、順番に、ちよっと、あああ〜」

玲子、押されて来たみたいに、居間に逃げ込んでくる。

玄関から、人がドサドサと入ってくる。

13

玄関に、溜まっていたのは、5組、9名。

全員、一斉に、口ぐちに勝手に自己紹介を始める。

(聞き取れないが、自己主張と個性が溢れる自己紹介)

なんのこっちゃかわからないまま、

袴田一同、お辞儀する。

明かりが変わっていく。

楽しいな音楽。

薄明かりの中、転換。

【一場】ある夏の日。夕方。

真美(声)

「マミーの、おしゃまでお邪魔！バンバンばんこはーん！」

明かり入ると、

おたまを持って踊るアイドル風な寺西真美(27歳)

カメラを回してる的場直樹(31歳)

腕組をしているディレクターの三笠綾女(35歳)

いろんな荷物を抱え、マイクも持ってる、

アシスタントディレクターの里中樹絵莉(19歳)。

縁側の廊下には、先程の客人が上手から

到着順に並ばされて座ってる。

(美夜、夕子、花園、富沢)

庭に亮介と朝日。なんとなく庭仕事している。

その中に派手な格好をした紺野真昼(51歳)が、
何故か交って一緒に作業している。

こずえ、晴彦、玲子、枕をかぶった恒夫が座らされている。

真美

「こんばんは。マミーだよ。今日はね、

こずえ、このおうちに、おしゃまでお邪魔しちゃうんだ。

カメラさん、こうちこうち、ほら、人がいっぱい。

おしゃまでお邪魔始まって以来の大家族！

どんなバンバン晩御飯が食べられるのかな、

おったのしみに〜」

三笠

はい、カット！チェックして」

里中

チェックですー」

チェックを始める的場。

素に戻る真美。

里中に手を差し出し、鏡を受け取りお化粧品チェックする。

三笠

すみません、じゃあ、次、台所で撮りたいんですけど、

台所は…」

こずえ

あ、こうちです」

三笠

あ、案内していただけます？じゃ、見てくるから、

里中

あれ、やっといて」

里中

あ、はい」

花園 すんません、扇風機つけてもいいかな、暑くて暑くて
三笠 ぞうぞう
花園 みんな、よく我慢できるなあ

扇風機をとる花園 守(39歳)

三笠と「ずえ、台所に向かう。
里中、台本を玲子に渡す。
晴彦が覗きこむ。
恒夫も枕から覗きこむ。

里中 えっと、こちら見ていただけるとわかると思うんですけど
「ここで」家族の構成など、「紹介させていただきます。
いろいろお話聞かせていただいてもよろしいでしょうか」

晴彦 ほんとにガチなんだね
里中 はい、ガチでやらせてもらってます
晴彦 もっと、髪型とか決めとけば良かったよ

玲子 口紅くらい、直したかったわ
里中 ガチなんでダメなんです
晴彦 俺ね、バンドやってんのよ、せつかくだからカツ「よく」
里中 ガチはそういうのいないんです

亮介 「庭先から」でもさあ、あれでしょ、ケーブルテレビでしょ？」
15
ほい」
亮介 ケーブルでもガチとかやるんだねえ」

的場 「カメラを見ながらボソボソ喋る」ケーブルをバカにしたらダメだよ」
亮介 えっなに？」
晴彦 でもどうせなら、全国ネットが良いよな」
的場 ケーブルの方が

全国ネットや地方局よりも、知り合いにみられる確率も高い」
亮介 なになに？何話してんの？」
里中 あちら、お兄さんですか？(メモをとる)」
晴彦 ぞう、あれが一番上の亮介で、二番目が、こずえ姉さん。

三番目が、あの枕の、恒夫で、四番目が俺、晴彦です」
里中 「両親は」
晴彦 うち、母親が小さい頃に、いなくなっちゃったんで。
里中 親父に育てられたんだけど、その親父も6年前に死んで」
晴彦 すみません」
「や、全然全然。

里中 ああ。時系列がめちゃくちゃだな、簡単に、紙に書きますよ」
「優しい」
晴彦 えっ……あ、そうですか？」
里中 髑髏とかつけてるから怖い人なのかと」

晴彦

ああ、まあね。ライブの時はね、ちょっと、やっちゃおうからな。良かったら今度、ライブ来る？招待してやるよ」

里中

え、いいんですか？」

押し入れがそつとあく。

峰子が、じつと、晴彦を睨む。

それに気づく晴彦。

峰子、押し入れを閉める。

晴彦

うん、時系列を正しく、我が家を紹介しようとしているんだよ。

(その辺の紙をとり書きました)

今現在はずね、

「この家は、恒夫兄さんが継いで、

「こちらの玲子さんが恒夫の奥さんで、家のこととしてくれてて。

でもって、うち、自営業なんですよ、袴田園芸。

で、その親父の後を亮介兄さんが継いで、結婚して、家だけ出て

あそこにいる朝日が生まれて、離婚して、出てきてきて、

あ、俺、絵、超得意なんです」

真美、煙草を吸おうとする。

玲子

「あ

真美

「あっ

玲子

「「めんなさい、うち、禁煙なんです」

真美

「無視して吸おうとする」

玲子

「ちやうど」

里中

あ、すみません。(真美に注意しようとして、真美に睨まれる。

玲子と真美を見比べて、玲子に)

すみません、一本だけ、ダメですか？」

ダメに決まっているでしょっ」

お願いしますよ」

はあ？何言っているの？普通、あっちを注意するでしょっ」

そっなんですよ、普通はそっなんですよ」

「じゃあ」

「火がなかなかつかない」里中、「ライター」

「はい」

なんで探すの、「めんなさい、あの、「」「、禁煙なんで」

私が、今、吸いたいの」

「じゃあ、庭でどうっぞ」

「陽に焼けちゃう」

「陽も落ちてきましたから」

「紫外線の怖さ、知らないのっ」

真美

玲子

真美

玲子

真美

玲子

里中

真美

玲子

里中

玲子

里中

玲子

里中

玲子

真美

玲子

真美

玲子

玲子 煙草の怖さは知ってますよ、百害あって一利なしですから」
真美 田た、煙草嫌いの人、すぐそれ言うのよね、

玲子 大丈夫です、私のカラダのことですから」

「ええ、それはそつでしようね、でも、

副流煙でガンになる確率、高いんですよ」

真美 あなた、周りに発がん性物質を撒き散らしてるんですよ」

「そんなの気にしてたら、この「時世」、生きてけないでしょ」

無菌で生きてるわけじゃないんだし」

「やめとき、理屈と理屈は、口論しても無駄だから」

富沢 そつですわ、そつなりますよ、

両方が自分の正論を言うだけですからね」

「そつそつ。って、急に喋った」

最後に並んでいた富沢リリか(33歳)立ちあがる。

富沢 私もそろそろ吸いたいんです」

「あ、庭でっ」

富沢 はい。庭で吸ってもいいとおっしゃっていただけのだけ
有難いですよ。

真美さんでしたっけ、あなたも欲望を叶えたいなら、
優先順位を決めてコントロールして行動した方がいいと思います。
わかります？超自我、自我、エス。フロイトです。

(縁側から外に出ながら)あ、申し遅れました、

私、富沢と申します。出版社に勤務しております」

「あ、富沢リリかさん」

「下の名前は言わなくて結構です」

「ワリか」

「繰り返さなくて結構です」

「ワリかだつて、あんたとい勝負ね」

「ライターを探しながら(はあ」

「この子なんか、樹絵莉よ、じゅえりー。キラキラネーム」

「無視して」現在、文芸部に配属されております、

そちらにいらっしゃる、袴田恒夫さんの担当をさせていただきます」

「ああ、お世話になってます、すみませんね」

「すみませんとはっ」

「なんか、ほら、まだ、書いてないんですよ」

「ええ。×切はとづくに過ぎません」

明日の早朝に印刷所に回さなければ間に合いません」

「えっマジでっ？つねちゃん、今、何ページ書いてんのっ」

「枕に埋もれる(」

「あ、さう」

富沢 正直、どつてもどつても焦っております。

直ぐにでも、机に向かっていたみたいです。
でも、私が着くよりも先に、あちらのケープルの方たちが
到着されていたのです。

更にいえば、「このように到着順に並んでますように」、
「こちらの男性や、ご婦人方も私の先に到着されていたのです。
とても焦っているのに、出遅れました」

真柴美夜(64歳)、津川夕子(35歳)、
突然、指名されて、戸惑いながら

美夜　あの、私たち、後でも構わないですよ、

ねえ、夕子さん」

「ええ。美夜さんがそうおっしゃるなら」

「うやって、いろいろ見てるのも楽しいです」

俺も別にいいですよ、大変そうだし」

「よろしいんですか？」

「はい、どうぞ」

「あ、あそこ、外にいる人は？」

「あの方は私より後でした」

「じゃあ、いいか」

「恐らく、私の用事が一番かかるかと思うので、

皆さまには申し訳ないのですが」

「急いでませんから大丈夫です」

「ぞしたら変わりますよ、お先にどうぞ(並びを入れ替わる)」

「ありがとうございます。では現状を印刷所に報告してきます」

「お婆さん、ライター持ってんなら貸してよ」

富沢、無視して、庭先に出る。

玲子　「里中に() どうしても

煙草を() で吸わせたいなら、撮影は中止してください」

「困ります。この企画、嫌がる() 家族多くて。」

「やっと引き受けてもらえたんです、もう動いちゃってますから」

「恒夫に() なんて断らなかつたのよ」

「うるさいなあ、お婆さんは」

「お婆さん」

「お婆さんでしょ」

「そんなに変わらないと思うけど」

「20代からみたら、30代はお婆さんですよ」

「なんで30代ってわかるのよ」

「あちこちに皺という人生の年輪が」

真美

玲子

真美

玲子

真美

玲子

真美

玲子

里中

玲子

真美

富沢

花園

夕子

富沢

花園

富沢

花園

美夜

富沢

花園

美夜

夕子

美夜

三笠と「ずえが戻ってくる。
花園、庭先に出る。

三笠 「どうしたの？」

里中 「あ

真美 里中さんが私に煙草をすすめてくれたんですけど、

「禁煙だったんです」

三笠 「じゃ吸わなきゃいいじゃない」

真美 「もう、気遣わなくていいからね」

三笠 「取材は？終わった？」

里中 「あ

三笠 「まだなの？」

里中 「すみません」

三笠 「的場、映像は」

的場 「オッケーです」

三笠 「じゃあ、次は台所だから、あっちでセッティングして。

里中 「ちゃんと取材してきてよ」

ほい 「

三笠 真美ちゃん、台所、来てちょうだい。

立ち位置、決めるから。

あ、あと、すみません、いつもタコ飯作る方は？」

私です」

じゃあ、お願いしてもいいですか？」

嫌です」

ほい 「

嫌です」

あれ、あの、先程は、了解していただきましたよね」

あの女に食べてもらってもなんなんかわれませんか」

真美ちゃん、あんた、またなんかしたのね」

えー、ひどーい」

ほんと、失礼な子ですみません。あの、でも、この番組、

マミーのおしゃまでお邪魔、バンバンばんこはんって」

聞きました」

マミーが食べないと成り立たないっていうのがあるんですよ」

本当にそうでしょうか」

えっ 「

何よ、当たり前じゃない」

そうですか？よく考えてみてくださいね。

マミーが家に邪魔してくるといっただけ押さえておけば、

別にマミーが食べなくてもいいんじゃないかしら」

ちよつと何言っつてんの

なるほど」

三笠

真美

玲子

真美

三笠

玲子

三笠

玲子

三笠

真美

三笠

玲子

三笠

玲子

三笠

玲子

三笠

玲子

三笠

里中

三笠

的場

三笠

里中

三笠

里中

三笠

真美

三笠

真美

里中

三笠

真美 なるほどじゃないでしょ」
的場 確かに固定観念ですね」
真美 あんたも普段、喋らない癖にな」
玲子 邪魔してきたママミが邪魔されるっていうのもありでしょ」
三笠 ああ、それいいですね」
真美 ちよっと、勝手に」
的場 マンネリでしたしね」
三笠 でも誰が食べましょう」
玲子 「の子(里中を指す)でいいと思いますけど」
三笠 里中」
真美 ちよっと」
玲子 見たと、お肌もキレイだし、10代？」
里中 「19歳です」
玲子 20代のおばさんより10代の方がいいわよねえ」
晴彦 え？ああ、まあ、そうかな」

押し入れが空いて、峰子が睨む。
それに気づく晴彦。
峰子、押し入れをしめる。

真美 「10代っていつても、かろうじてじゃない」
玲子 「10代からしたら、20代なんておばさんでしょ」
こずえ どうしちゃったの、玲子さん」
晴彦 逆鱗にふれたみたい」
三笠 じゃあ、里中、やってみるっ」
里中 はあ」
真美 「三笠さん」
三笠 真美、これもチャンスなのよ」
真美 チャンス？」
三笠 だって、あんたもう痛々しいじゃない、この格好」
真美 そんなこと」
三笠 あるのよ、そういうのは自分が決めることじゃないの」
的場 そろそろ路線変更しないとな」
真美 何よ、偉そうに」
的場 当たり前だろ、俺が台本書いてんだから」
晴彦 あ、そうなんですか」
的場 「カメラを置いて、紙をとり書き始める」
三笠はディレクター兼プロダクションの社長。
俺は放送作家兼、カメラマン。
2人とも制作会社にいたからさ、
他も大体一通りできる。最近じゃ珍しくないよ、
予算ないから重宝されるんだ」

真美 ちよつとちよつと、何、早速書いてんのよ」
 富沢 『戻ってきていて、作家さんなんですか』
 的場 放送作家です、小説とかは書きませんよ」
 三笠 ひゃあ、的場が台本書いている間に、里中、ちよつと準備しちゃいますよっ」
 里中 準備？」
 三笠 「こんな格好じゃダメでしょ」
 こずえ あ、私、スタイリストなんですけど、選びますよっか？」
 三笠 え、やだ、すっ」
 こずえ ちよつと、さつき、プロモーションビデオの撮影から帰ってきてね、スーツケースの中に衣裳が。「うちまで」
 里中 あ、取材が「こずえ、里中を連れて、隣の部屋にいく」
 晴彦 家族構成は、書きだしてるんで、大丈夫」
 三笠 なんて頼もしい協力的なお宅なのかしら」
 晴彦 玲子さんの料理も、すっ」ですよ、あの、
 三笠 レシピのお姫様に選ばれたこともあるんだから」
 三笠 え？あのお昼の番組の？お姫様だったんですか？」
 玲子 え、え、すっ」じゃないですか」
 三笠 昔の話なんですけど」
 玲子 でも凄いですよー」
 三笠 そうですか？誰も美味しいとか言ってくれないんで、もう麻痺しちゃいました、作り甲斐もないし」
 恒夫 え？何それ、言っていないの？」
 晴彦 「や、言わなくても分かってるし」
 恒夫 それは、つねちゃん、
 晴彦 言わなきゃダメだろ、女は言葉が欲しいんだからさ」
 玲子 そういふ言い方やめてもらえる？」
 富沢 当たり前のことを当たり前にしてたらダメってことですよ、ね、基本です」
 玲子 それにそもそも、この家族、味おんちなんで」
 晴彦 そうなの？」
 亮介 そうだったか？」
 朝日 わかんないよ」
 恒夫 そうかな」
 玲子 舌がお子様なんです」
 花園 ああ、なんでもマヨネーズとか」
 晴彦 でも、親父の料理がそうだったし」
 恒夫 お袋の味とか知らないもんね」
 亮介 でも味おんちではないよなあ」
 玲子 味おんちです」
 亮介 はい」
 三笠 それでも、玲子さんの料理は美味しいって思ったわけですね」

恒夫

美味しいっていつか、すっ」

晴彦

すっ」

亮介

すっ」

玲子

「……私、レンゾのお姫様だったんですよ。

うちは「のうちと逆で、母親だけだったんですけど、

小さい頃から「飯は私が担当だったんで。

母は呑んだくれてばかりだったんで、どうでもいいんですけど。

ほんと別にどうでもいいんです。

「この袴田のお父さんによくしてもらったんで

大丈夫だったし、で、「のうちによく出入りしてるうちに、

袴田家の食事をみてて、役に立ちたいって思ったんです。

でも「ことごとく、「ことごとくですよ、わーすっ」って。何それ。

美味しいか美味しくないかわかんないんです。

食事なんかどうでもいいんですって。

私、自分のこともそう思うようになりました。

毎日、どうでもいいように消えていく「飯を見ていて、

私の存在も、こんなもんかって」

そういう思考になるのは当然の流れです」

料理をつくったら、美味しい顔を見たいじゃないですか」

そうです。喜びは誰かのために何かをすることの原動力です」

なのに、「この人たちは」

なんて人たちのかしら」

的場、いけるわ、これ、当たるわよ」

はい、アイデアが今、溢れてます。

これこそ、晩御飯の真髓」

書いて、書いて、早く書いて、そして、台所で

カメラチエックして」

はい！」

燃えてきたわ、三笠綾女。久しぶりに燃えてきたわ！

玲子さん、今、今、この味おんちの「家族に食べさせたいもの、

ありますか？！」

え？ど、どうだろう、なんだろう」

つくりましょう！」

え」

大丈夫です、全てを取り戻すチャンスです！

玲子さん、あなたはどうでもいい存在なんかじゃないんです。

一緒に「飯がいかに大切か思い出させましょう、それは

あなたの大切さをあなた自身が取り戻すことに繋がる！」

取り戻す……？」

そうです、あなたも（恒夫に）離婚されそうなんですよね？

で、あなたは離婚したくないんですよね？

三笠

玲子

三笠

玲子

三笠

玲子

三笠

的場

三笠

的場

三笠

富沢

玲子

富沢

玲子

富沢

恒夫 最低なクズ野郎なんですよね？」
三笠 「そ。そんなこと誰から……あ、こずえちゃん？」
三笠 「愛を取り戻せですー！」
晴彦 「そうだ、取り戻せ！」

亮介 「おくわかんないけど、そうだそうだ！」
三笠 「あなたたちも！」
亮介 「え？」

三笠 「麻痺してる感覚を取り戻しましょうー！」
晴彦 「麻痺してたの？」

亮介 「ごのまごっ！」
富沢 「自我の崩壊は無意識です」
亮介 「崩壊？ー！」

富沢 「プラトン、アリストテレス、デカルト、ロック……心の探究がはじまります。そして、

ヴント、フロイト、ワトソン、アドラー、ユング、トールマン、
ロジャーズ、マズロー！

実験心理学以降、行動主義心理学、ゲシュタルト心理学、
精神分析学が生まれます。

でもまだまだ……そこから

個人心理学、分析心理学、新行動主義心理学、人間性心理学

自我心理学、臨床心理学、行動分析学、トランスパーソナル心理学

(むせる。水を飲む)

23

だ、大丈夫？」

亮介 「お待たせしました、認知心理学。」
富沢 「私たちの日常を支えているのは感覚と知覚。」

人間は感覚器官によって、外部から多くの情報を取り入れます。

脳は、その情報を過去の経験から判断し、適した行動を取らせる。

この情報を認識する働きが知覚です。

つまり、同じ状況におかれて、同じ情報が与えられていても、

人によってとる行動が様々なのは、過去の経験は人によって

異なり、知覚に個人差があるからなのです」

つまりが、つまりじゃないよ」

道でイヌに逢います。はい、こいで働く感覚は、

視覚、聴覚です(実際、晴彦を犬に見立てて実践する)

見た、聞いた、脳みそが情報を処理します。過去の経験！」

犬、噛まれたことあるからなあ」

お隣のうちの犬が、私に超、懐いてたの」

はい、認識します、これが知覚。怖い、よける。可愛い、撫でる」

おおお」

富沢 「人間の情報量はダントツで視覚、聴覚です。逆に依存度も高い。
触覚、味覚、嗅覚は

記憶や心の結びつきも強い。」

三笠

記憶というのは、感覚貯蔵記憶、そこから、短期記憶、「あの、そろそろ」

富沢

そして、よびさまされる！

大切なのは、欲求。

欲求こそ生命活動の最大のエネルギー源なのです！

アドラーは、人間には生まれつき劣等感があり、

権力への意志と優越への欲求が人の行動の原動力となると唱えました。

マズローは、人の欲求には階層があると主張しました。

基本的欲求が満たされて、そう、満たされてはじめて、

自己実現や自分を高めようという欲求に繋がる」

生きるってそんな難しいことだった？」

つまり――

欲望は人生の豊かさにも繋がる。先生の小説がそうなんですよ！

恒夫

え？ええ？」

富沢

「の波にのりましょう」

恒夫

ち、どの波ですか」

富沢

「この放送作家さんの書いていることを参考にして

恒夫

ぼくりっ」

富沢

違います！参考です」

的場

「これ、番組の台本だけど」

富沢

逆にいえば、この家の事を面白おかしく書くわけですよね」

的場

まあ、ちよつと、フィクションも交えながら」

富沢

つまり、先生はこの原作を書くんです」

恒夫

カンフィクションっ」

富沢

曖昧で！ノンフィクションっ？フィクションっ？の狭間でいきましよう。

(晴彦が書いてた紙をさす)(この時系列どおりに、

記憶を辿りながら、五感を研ぎ澄まし、好きに書いてみなさい

なにこれ、絵しか描いてないじゃん」

富沢

絵っ」

晴彦

俺、絵だけは得意なの。これね、覚えてる？このうちの庭のさ

富沢

すこいわ、あなた、挿絵をかきましよう」

晴彦

ええっ？」

富沢

先生、いけます、これで、いけます、書きましょ、理想の人生」

恒夫

え」

晴彦

絵っ」

朝日

タジャレ」

亮介

タジャレ祭り」

富沢、原稿を書く恒夫と晴彦を見張る。

三笠

「世二代のチャンスが来たわ。真美！」

真美

「おたくでされてる」

三笠 あんたにもチャンスが来たのよ」

真美 おばさんとか嫌」

三笠 もっ、いろいろ捨てなさい」

真美 捨てたら、なんにもなくなっちゃう」

三笠 捨てて、また得ればいいのよ。大丈夫、

あんだ、素の方が面白って陰で言われてんだから」

真美 嘘、そうなの？こんな可愛く盛ってるの？」

的場 残念だけど、事実だ。だから俺たちはキャラチェンジの機会を
うかがっていた、そして、今がその時なんだ！

いじわるマミーの時代がくる」

真美 「いじわるマミー……」

三笠 「うち来て……隣の部屋に真美を連れていく」

真美 「ずえさん、」の子にも衣裳を。いじわるばあさんがモデルね……」

真美 ばあさん……」

三笠、すぐに戻ってくる。

三笠 きあ、玲子さん、台所にいきましょっ……

的場も……あつちで料理とともに台本をあげちゃいましょっ……」

三笠、玲子、的場、台所に行く。

美夜 懐かしいわ、いじわるばあさん」

朝日 「いじわるばあさん？」

美夜 入気の漫画でしたよ、サザエさんの長谷川町子さんのね」

花園 「いじわるやいたずらが、いきがいなんだよ」

朝日 やなやつじゃん」

花園 それが裏目に出て人助けに繋がったりしちゃうんだよね」

美夜 本人はいじわるやいたずらのつもりなんですけど、結果、お節介に

人と関わってたりして。今の世の中、きれいな物語ばかりですからね、

そんなのはかりだと、逆に自分が嫌になっちゃうこともあるそうですよ。

きれいごとだけじゃなく、毒も必要ですからね」

富沢 どころで、ケーブルさんたちは、もうちよっとかかるんでしょうか」

花園 あ、そうですね」

夕子 台本と料理の時間もあるでしょうね」

富沢 では(花園に)良かったら

お先にどっぞ。

私の用件は原稿をあげていただくことなんで、

メドがつきそうです」

花園 あ、そっか、

俺の用件が終われば、あとは、

「こちらの」婦人方と、撮影と小説と……というわけか」

亮介
花園

なるほど、わかりやすい」
じやあ(立ちあがり身だしなみを整えて睨みをきかせる)。
お世話になっております。
花園金融ですが」

夕方の蝉の声。

明かり変わっていく。

音楽。

薄明かりの中で転換。

【二場】ある夏の日。夜。

明かり変わる。

正坐して座っている、亮介、恒夫、こずえ、晴彦。
花園にお酒をついでいる朝日。

縁側に座る、富沢、美夜、夕子。
庭先で涼んでる真昼。

調理用具をもって覗いてる玲子。

花園 なんかおもてなししてもらって、すみません」
朝日 こんでもないです」
花園 だ??」
朝日 どうなってるんでしょっつ」
花園 どうなってるのかな」
朝日 返してもらえないですかねえ」
花園 ねえ」
朝日 ほんと、すみません」
花園 ほんと、すみません」
朝日 ちよつと、トイレ」
玲子 ああ、トイレ、トイレは「ちよつとです」

花園、玲子に連れられて、トイレに行く。
押し入れが少し開く。
峰子が覗いている。

朝日 「ね、なんで私が」
亮介 「おばさん」、「お酌してもらうより、
若い子の方が喜ぶかなあって」
朝日 「それでも父親〜？」
亮介 「けど、とにかく、酒香ませてみたら、
なんとなく、うやむやになってきてるじゃないか」
晴彦 「うん、このまま、酔っ払わせてな」
朝日 「何にも解決しないよ〜」
つねちゃん、ねえちゃんももうお金ないよ、
つねちゃん、ねえちゃんももうお金ないよ、
何回も肩代わりしてきたんだから」
亮介 「ずえもっ、俺もだよ」
晴彦 「俺だって」
朝日 「私だって」
亮介 「え？！」
朝日 「お年玉…。」
つねちゃん…。」
つねちゃん「…このお年玉まで手を出したらダメだよ」
「なんで、つねちゃん、こんななんっちゃったかね」
恒夫 「ほんと、なんでかなあ」
亮介 「お前が言うな」
晴彦 「さっちかっつていうと、つね兄が」
「…の中ではいちばん、しっかりしてたけどなあ」
つねちゃん「さうよ、中学も高校も、つねちゃんがいちばん、
まともに行ってたもん」
亮介 「むしろ、グシなかったのは、つねちゃんだけだろ」
恒夫 「さっつさっ」
つねちゃん「さうよね」
亮介 「俺なんていち早く、ひねくれたのにさ」
晴彦 「つねちゃん、良い子だったもんね」
つねちゃん「うん、俺、つね兄、自慢だったもん」
恒夫 「やめろよ、はるちゃん」
つねちゃん「でも私もさうだったよ。」
亮介 「なんかさ、つねちゃん褒められると、
自分も偉くなった気がして嬉しかったな」
つねちゃん「さうだったよな、良い子だったよな…つねちゃん。…そっか」
亮介 「さうしたの」
つねちゃん「「や…良い子だったからな、つねちゃん、
その分、いろいろガマンしてたんだらうなってさ」
さうよね、だから今じゃ、酒、女、ギャンブル、借金」
無理もないね」
つねちゃん「「やい、やい、や」

こずえ 無理もないわ」

朝日 違うでしょ」

亮介 きつと、遅れてきた反抗期なんだなあ」

こずえ つねちゃん、反動が出ちゃったんだね」

晴彦 「ごめんな、つね兄」

恒夫 「いよ、いよ」

富沢 「この人たち、バカなんですか？」

朝日 バカなんです」

富沢 あのですね、どんな状況でも、どんなに良い子でいなぎやっつて自分を抑え込んだとしてもですね、

それが言い訳にはならないんですよ」

4人 え？（よくわからないって顔）」

富沢 確かに内的要因や外的要因から不安定になり、

現実に適応するために

無意識に防衛機制を働かせることはあります。

抑圧、逃避、退行、同一視、投射、合理化、代償、昇華、

補償、反動形成。

それらの防衛機制は真の問題解決法ではないと言われます。

それでも、正攻法ではないアプローチからでも、

別の目標や解決法が生まれたりしますから、

防衛機制そのものをせめてはいけません」

4人 【首を傾げる】

富沢 欲望を抑えてた人が急に爆発することもあります。

でもだからといって、なんでもしていいわけではないんです」

4人 【頷く】

富沢 わかってんだか、わかってないんだか、はっきりいましてよ」

花園、トイシから戻ってくる。

峰子、襖をしめる。

朝日、素早くお酌をする。

玲子、覗いている。

花園を無視して話が進んでいる。

美夜 ヴリかさん」

富沢 「

ヴリかさん、あなたは正しいかもしれない、

でもね、わかつちやいるけど・・・

つてこの世の中には溢れてるんじゃないかしら。

ねえ、夕子さん」

夕子 どうですかね」

美夜 わかつちやいるのにねえ、ほんとに、

人間、正しいことがわかっているのにねえ、

富沢 誤ちをおかしてしまうんだから、イヤになっちゃうわね
確かに……そうなんですけど、だからこそ、

なるべく間違わないようにしたいんです」

そうね、それでも間違ってしまったら……」

次は間違わないようにするしかないんじゃないかしら」

そうなのよねえ、でも、その間違いの時に、失うものも得るものも

とつても多いから、難しいわね、人生は」

先生」

恒夫さん」

はい」

無いものをねだってしまったのは何故なのかしら」

だから、心の隙間よね」

理めようとしたんだな」

そういうのじゃなくて」

えと……なんとかなるかなって」

急にダメダメだね」

ほんと、なんとかなればいいのに、なんないのよねえ」

なんないんです」

でもそれで、あなたの周りが傷ついたら……」

「……」

きつとね、なんとかなるかなって思いこもった

その前に、考えるのをやめたところに、なんかあるのよね」

「……」

生きていれば、

体力も気力もずいぶん変わっていきますからね。

限界も感じるし、人生は無限でないことに気づくし」

気づき始めてます」

受け入れて、人生の転換期がきたと思えばいいのよ、

今だから、できるってこともたくさんあるわ」

結晶性知能ですね」

「これまでの経験を生かせる時がくるの」

ウリかさん風に言うならば、愛着からの心の形成、

他者との関わりと自己抑制、

そうしてアイデンティティの確立、

その確率が出来てなごう」

富沢 中年期クライシス」

夕子 世の中には説明文が溢れます、でも、

説明のつかない思いも行動もある。

無理に言葉を飾っても言葉では守れないものもあるから厄介です」

こずえ うん、だって、今なんか、じゃあ、実際、具体的に

つねちゃんの借金返済はどうすんのよって話でござい……」

夕子 自分がしたことは自分でちゃんとするしかないです」

美夜 誰も助けてはくれないますからね」

恒夫 はい」

美夜 それでも、

助け合うことが出来るのが人間ですから」

花園 あのう……」

美夜 あ、「ごめんなさい、割り込んでしまいました」

花園 「えいえいえ、あの、

あなた方の用件ってなんだろううなあって」

美夜 まだ、順番が来てませんから」

夕子 まずは、そちらを」

花園 ああ、はいはい」

花園、かしこまる。

全員、かしこまる。玲子も座る。

花園 ぶっちゃけ、どついたら返してもらえるんでしょうね」

亮介 どついたら……」

花園 返してもらえないならもらえないで、どついたらいいのか」

こずえ 自己破産とか」

晴彦 バカ、借りた人の前でいつちやダメだろ」

こずえ そうなの？」

花園 俺も憎くてやってるわけじゃないんですけどね」

亮介 そうですよね」

花園 むしろ、大事に想ってます」

晴彦 あ、ありがとうございます」

花園 大切な存在なんですよ」

こずえ ほあ(恒夫を見る)」

恒夫 「……ん？」

花園 そりゃ、一度は愛しあったんですもんね」

全員、恒夫を見る。

恒夫、首をふる。

花園 あんなに愛しあったのに……

愛って、なんなんでしょうかね」

恒夫 あの……」

花園 「いいんです、いいんですよ。

仕方ないことなんですよ、でもね、やっぱりね、

家に帰りますでしょ、使ってたお茶碗とか見るとね、

なんでもっと一緒にいてやれなかったんだらう。

なんでもない」ことが幸せだったなあって思うわけですよ」

押し入れが開く。

峰子 「あんた〜!」

花園 「峰子?!」

峰子 「抱きつく!あんた!」

花園 「峰子〜!」

晴彦 「えええ?!」

峰子 「ごめんね、あんた、ごめんね、寂しかった、

私、寂しかったからあ」

花園 「いんだよ、いいんだ」

晴彦 「あれ、峰ちゃん?あれ?」

峰子 「ほるちゃん、ごめん、やっぱり、私、結婚できない。

ついでに言えば、この赤ちゃんは、

はるちゃんの子じゃないの!」

晴彦 「え、え?ええ?」

花園 「赤ちゃん?」

峰子 「うん。まもちゃん。あんたの子だよ」

花園 「ほ、ほんとが、峰子」

峰子 「まもちゃん。こんな私を許してくれる?」

花園 「帰ってきてくれるのかい?」

峰子 「やっぱり、まもちゃんじゃなきゃダメ」

花園 「俺もだよ、峰子!」

峰子 「まもちゃん!」

花園 「すまねえ(晴彦に)峰子を、峰子を返してくれますか?」

晴彦 「え?ええと」

峰子 「ごめんね。私、あなたを利用してたの」

晴彦 「利用?」

峰子 「あんたの兄さん、うちに借金あるでしょ、あてつけに、

あんたと結婚すれば、いつか、この人に逢えると想ったのよお」

花園 「峰子、ダメだろ、また、そんなこととして。」「迷惑じゃないか」

峰子 「だってだって」

晴彦 「いや、迷惑とかじゃなくて」

花園 「わかってる、俺が悪かったんだよな」

峰子 「まもちゃん・・・」

花園 「寂しがらせてごめんな」

峰子 「たまには一緒にごはん食べてよ〜」

花園 「いくらでも食べるよ〜」

晴彦 「なんだそりゃー」

富沢 「はい、アイデンティティの崩壊、再構築が必要ですね」

峰子 「あのね、あんたたち、食事は重要よ、

私、この奥さんの気持ち、わかるわよ、ほんと」

花園 「ぞうか、お前も聞いてたんだもんな」

亮介　じゃあ、あのー、今日は、借金の取り立てでは無い……？
花園　えっ、ああ、今日は違うよ！
こずえ　「ええっ。」
花園　俺、集金担当じゃない！
峰子　まもちゃんは社長なのよ、やるわけないじゃない！
花園　あ、集金は期日通りにやらせますから、
こずえ　「この」恩とは別な話になるんですんません」
峰子　当たり前よ、あんたねえ、借りたお金は返さなきゃダメよ
晴彦　嘩ちゃん……」
峰子　「伊」が気安く呼ぶなあー」
花園　「この家と土地、担保になってるからちゃんと返さないかね
亮介　担保にっ？家が？」
こずえ　「じゃあ、つねちゃん、返さなかったら、
こずえ　「この家、取られちゃうのっ。」
晴彦　え……」
亮介　「や、それは……」
恒夫　それは勘弁してください。大事な家なんです」
花園　だから、返せばいいんじゃないかな」
恒夫　返します」
晴彦　つね兄、あてもないのに」
恒夫　「机に向かう」
晴彦　「そうか！（机に向かう）」
富沢　え。ちよつと。そんな直ぐにお金になりませんよ？」
亮介　期日もあるしなあ」
花園　あ、朝日、うちがいったん立て替えて、
亮介　それでつねちゃんから返してもらって手もあるよな」
朝日　そうしたいけど、うちもそんなにないよ」
亮介　あー俺、もつと頑張っておけばよかった」
恒夫　ちがうよ、亮ちゃん、俺がいけないんだから」
晴彦　つね兄」
恒夫　わかつちやいるけど……って、ほんとそうだったんだ。
朝日　「ごめんな、りようちゃん、こずえちゃん、はるちゃん。
玲ちゃん、ごめんな。甘えててごめんな。
俺、そんな直ぐには変われないけど、
こずえ　「この家だけは、取られないようにするから」
つねちゃん」
花園　あの、あの、待ってもらえませんか？」
峰子　待ってもいいけど、どんどん膨らむよ」
真昼　「じゃうがないよね、そっいう約束だもん。
約束は守らなきゃ」
真昼　「感謝料とれはっ。」

急に喋りだす庭先にいる真昼。
顔を見合わせる面々。

喋りですが、顔はあまり見せないようにしている真昼。

真昼

約束、大事よね、だから感謝料。

峰子

ほら、その女、婚約不履行。詐欺じゃん

峰子

はあ？あんた、何いってんのよ。

真昼

ああ？……あつー！

真昼

ね、感謝料と相殺

峰子

真昼ママ……真昼ママだー！

花園

知り合いか？

峰子

あれよ、うちの店の隣でさ、

花園

熟女。パブやってた真昼のママよ〜

峰子

ああ、すごい儲かってたって、熟女。パブの」「、

峰子

やっぱり時代は熟女だもんねえ、ねえ、ママ。

真昼

今、どこにいるの？急にいなくなるから心配したんだよ

真昼

「ろいろあつてさ」

峰子

えーじゃあ、見られてた、見られてた？

真昼

見てた見てた、さすがカメレオン峰子

峰子

言わないでくださいよお

真昼

まあさ、あんたたちも分かっているとと思うけど、

花園

あいつ(晴彦)の事、軽く騙したんだからさ、

花園

あいつ(恒夫)の借金をあんたからの感謝料で相殺しなよ

峰子

「や、それは」

真昼

バカ、警察行くと思えば、安いもんだろ

峰子

「や、でも、それは……」

真昼、2人をつかまえて、コソコソなんか脅す。

峰子

ああ、そうね、うん、そうしよう、まもちゃん

花園

峰子がいいなら

真昼

だから家も取られない。ね、一件落着

恒夫

すみません

真昼

祀は、あいつ(晴彦)の、痛々しい傷に言ってやんな

晴彦

あ、大丈夫です、僕のことなら、

真昼

たぶん、成長ホルモンかなんかのドキドキと

真昼

勘違いした気の迷いかと思っつので

晴彦

寂しい時は泣くんだよー！

真昼

「うわーん」

真昼

じゃあなー！

こずえ

ま、待ってください

晴彦

ぞういえば、ご用件、聞いてなかった

真昼 私、一番最後だから
美夜 あ、どっぞどっぞ
富沢 どっぞ

いつの間にか、廊下から覗いてるケーブル隊の面々。

三笠 どっぞ
真昼 どっぞって言われてもな

玲子、庭先に降りて行き、
真昼のサングラスとか帽子とかウィッグをとる。

恒夫 玲ちゃん。ちよつとやめろって
玲子 やっぱし

こずえ あれ、おばさん。じゃなかった、玲ちゃんママ

晴彦 え？玲ちゃんママ？

真昼 入違いです

玲子 何ちゃっかり来てんのよ

恒夫 俺が連絡したんだよ

玲子 つねちゃん？

恒夫 たまには、来てもらおうかなって

玲子 『いのに、こんなやつ。』

真昼 どうせ呑んでくれるだけなんだから

玲子 うるさいな、私も来たかったんだからいいだろ

真昼 はあ？恩知らずが良く言うよ

真昼 袴田のおやつさん、七回忌だって言うしよ、
お線香あげにきたんだよ、変装して親戚に
混じって上がりこむ予定だったんだ。

でも日にち忘れちゃってさあ、

玄関に人だかりあったし、てっきり今日でいいんだと
思ったら、違っし、気づいたら、家の中だし、
急に消えるのも不自然だし

玲子 消えればいいじゃない

真昼 でもうまく変装できてただろ？

峰子 『や、真昼ママ、悪いけど、すぐわかったよ』

真昼 そうだよ、玲ちゃんママ。俺、どうしていいかわからなかったよ
うん

峰子 注目されなかったら、バレなかったじゃないか

真昼 注目されないようにしたら良かったじゃん

玲子 たって、玲子の住む家がなくなったら、困るだろ？

「……」

恒夫 すみません

玲子　「ハカみたい」
真昼　「バカなんだからしょうがないよ」
恒夫　「玲ちゃん、勝手に「ごめん」
玲子　「今更いいわよ」
恒夫　「でもさ、玲ちゃんとお義母さんの喧嘩、
見るの好きなんだ」
玲子　「俺も」
玲子　「何よそれ」
玲子　「喧嘩出来るの羨ましいなってさ」
玲子　「……」
真昼　「『くらでも見せてあげるけど』」
玲子　「ちょっと黙ってて。」
玲子　「……汚れ、落としてきなさいよ」
真昼　「上がっていいのっ」
玲子　「玄関からね」
真昼　「はい」
玲子　「良かったね、真昼ママ」
花園　「良かったなあ(何故か感動している)」

真昼、玄関に回る。

玲子　「あ、ごめんなさい。私の家じゃないのに」
恒夫　「玲ちゃんちだろ」
亮介　「そうだよ」
こずえ　「玲ちゃんちでしょ」
晴彦　「玲ちゃんちじゃなかったら、誰んちだよ」
朝日　「はかまだんち」
三笠　「はあ、話題に困らない家だわね」
的場　「ネタありすぎで、晩ごはんが弱くなっちゃいますけど」
真美　「顔だけ出してていうか、いつ撮影はじまんのお」
里中　「顔だけ出してあの私ももう緊張マックスなんですけど」
三笠　「ちょっと待って、まだ、あちらが終わってないわ」
玲子　「そうでした、すみません、すっかりお待たせして」
美夜　「大丈夫ですよ」
亮介　「いえ、こちらも、もう大丈夫です」
美夜　「よろしいんですか？では、夕子さん」
夕子　「はい。こちら、弁護士の実柴美夜先生です。
私は、秘書の津川夕子と申します。
この度、私どもの事務所に「依頼がありました、
お伺いさせていただきます」
弁護士さん」
夕子　「はい、借金支払いუნぬん件では、「っ」「みど」ろ満載で

ありましたが、依頼されておりませんので、なるべく出しやばらずにありました」

玲子「はあ……それで、」用件は？」

夕子「はい。明日はお父様の七回忌ですよね、実は、

「こちらをお預かりしてまして」封筒を出す」

誰からですか？」

亮介「お父様からです。

夕子「封は、立会人、弁護士と共に七回忌の日」

開封するよう」に、と」

恒夫「開けようとする、こずえに止められる」

夕子「まだ、指定された日にならなくなっておりません」

亮介「明日、な」

晴彦「なんで七回忌なんだろう？」

真昼、玄関から回ってくる。

峰子と花園に合流する。

夕子

それから、「こちら……こちらは特に」

法的効力のないもので、中身は「自由」

見ていただいて大丈夫なんです」

玲子「それは？」

夕子

お父様のエンディングノートです」

玲子

エンディングノート……あの、最後に

夕子

どうしてほしいか書いておく……」

こずえ

そつです」渡す」

夕子

「手に取って、でも開けず」えーやだ、もう、

亮介

お父さんったら……なんなんだろう、流行りにのったのかな。

夕子

今、渡されても、もうお葬式終わっちゃったよ」

夕子

「たずら好きだったから、驚かそうとしたんだろ」

玲子

もう一冊あります」

夕子

もう一冊？」

4人

「「こちらは、お母様のエンディングノート」

夕子

「……誰も手に取らない」

こずえ

置いておきますね」

亮介

父のはわかりますけど、私達には、母は、いないんで、ねえ」

恒夫

あ、あ、もう25年以上前に出ていったんで」

晴彦

すみません、それって」

こずえ

「……もう死んじゃったって」」と？」

晴彦

「……」

こずえ

エンディングノート……」手をのびそつとすめる」

こずえ

「ほめるちゃん」止める」

晴彦

「やめる」

玲子

あの、このノートは、本人が持参したのですか？」

夕子

「はい」

玲子

渡してくださいます……」

夕子

「いえ、そのようにはおっしゃってませんでした」

こずえ

「じゃあ、なんですか」

夕子

「こちらの遺言書をお届けするので、せっかくだから」

こずえ

「奈計な」のですよ」

美夜

「庭を眺めて」お庭、きれいですねえ」

亮介

え、ええ。あの、父が園芸やってまして。

美夜

それを俺が引き継ぎまして」

亮介

まあ、いいですね」

亮介

「えいえ、家の方は、つねちゃん、あ、恒夫が

美夜

継いでくれたんで、家業だけでもって……」

美夜

思ったんですけどね、まあ、景気も良くないですしね、

美夜

いろいろ大変です」

美夜

でも「立派ですよ」

亮介

「……ありがとうございます」

美夜

ひまわり、いいわねえ、ひまわり。

こずえ

花言葉はあなたを見つめてる」

美夜

「はい、ひまわりは……」

こずえ

「はい」

美夜

「ごめんなさい、なんか、なんだろ、いろいろ混乱してて」

美夜

大丈夫ですよ」

こずえ

「……大丈夫だよね」

亮介

「うん、大丈夫だ」

こずえ

大丈夫って何がだるうね」

亮介

「うん、何が大丈夫なんだろうな」

こずえ

「だって今更なのに」

亮介

「うん、今更だ」

こずえ

母が出て行ったのは、りょうちゃんが12歳、

こずえ

私が10歳、つねちゃんは2歳で、

こずえ

はるちゃんは生まれたばかりで、それからずっと、

こずえ

私達は、父に……大切に育ててきてもらったんです。

こずえ

そして、あの庭は、父と私たちが大切に、大切に……。

こずえ

小さい庭ですけど、父は大切に季節ごとの花や

こずえ

木を植えました。

こずえ

母の大好きな花や木を。母を想って」

こずえ

美夜がこずえを優しく抱きしめる。

こずえ

美夜がこずえを優しく抱きしめる。

美夜

がんばったんだ、ね」

こずえ
美夜
こずえ

え？」
頑張ったんだもんねえ」
「……うん」

美夜、亮介の頭も撫でる
晴彦と恒夫も呼び寄せ、
晴彦、恒夫にも微笑む。

美夜

偉い偉い。偉かったねえ」

明かり、ゆっくり変わっていく。

薄明かりの中で転換。

【四場】ある夏の日。深夜

楽しいな音楽が流れる。

明かり変わっていく。

割烹着姿の真美と
アイドルみたいな格好の里中。

真美
里中
真美
2人
里中

「じわるマミーと」
「たずらジュエリーのおしゃまで」
お邪魔で食物連鎖！」
ハンバンばんごはん！」
「んばんは。ジュエリーです！」
今日は、「んばん、袴田さんちにやってきました！」
この袴田さんち、なんとなんと、
元レシピのお姫様がいるんですって！
でもね、でもね、そのお姫様には
悩み事があるんだって。

真美
里中
真美

一体、なんだろなんだろ」
あんた！なにやってんだい！」
きゃあーいじわるマミーがきたわー」
今日も「んちの晩御飯は私が食いつくす！」

里中

ジュエリー、負けないもん！」

2人、踊りだす。

玲子、撮影隊を呼びにくる。

玲子

あの、ごめんなさい、もう少し、静かにやれませんか？
もう深夜なんで」

真美・里中

すみません」

三笠

うーん、どうしようかな、

的場

オーピングは賑やかじゃないと締まらないなあ」
あとから、声いれましょうか」

三笠

それでいいこう！

玲子

あの、ちよつとでも音出すのも」

三笠

やめてもらえますか？近所迷惑なんです」
ですよ、深夜だもん。うん、完全にオフでいいこう」

三笠

三笠、指示だして、カメラを構える的場。

2人、口パクで踊りだしながら台所に向かう。

ほぼ形態模写で、ロケしていく2人。

同じく口パクで後をおう的場、三笠。

玲子

もうほんと、撮影終わったら帰ってくださいね」

玲子、居間にいる兄弟たちを見る。

縁側で楽しそうにオセロをしている、美夜と朝日。
それを見守る夕子。

押し入れの中でお酒を飲んでる、

真昼、峰子、花園。

時折、開いたりして様子がわかる。

原稿を書いている恒夫。

隣でなんか描いている晴彦。

原稿と恒夫を見張っている富沢。

深夜なのに、庭でバットの素振りをしている亮介。
庭を見ながら、ぼーっとしている「ずえ。

ノートは無造作に2冊おいてある。

玲子 「「ずえちゃん」
こずえ 「ん？」
玲子 「……」
こずえ 「……」
玲子 「何よ」
こずえ 「どうするの？」
玲子 「……んー」
こずえ 「ひょうちゃん」

素振りをしている亮介、手を止める。

亮介 「ん？」
玲子 「どうするの？」
亮介 「「バットを置いて、上がってくる」(麦茶いい?)」
玲子 「はい」

玲子、麦茶を取ってくる。

無言でノートを見ている、こずえと亮介。
その様子を見る恒夫と晴彦。
原稿の手を止めて、恒夫と晴彦、
2人のところに行く。
ノートを見ている。

玲子、麦茶を持ってくる。

玲子 「はい」
4人、麦茶を飲む。

こずえ 「あ」
亮介 「あ」
晴彦 「甘い」
恒夫 「…甘い」
玲子 「特別です」
4人 「…うん」
玲子 「特別なんだから、考えるのをやめたらダメですよ」
4人 「……うん」
玲子 「のむ(あま)」

縁側から夕子が近づく。

夕子 重なる時は重なるって言いますね

亮介
「ですね」
「やっぱ見れないよ。だって、お父さんのお葬式は終わっちゃったし。」

「その…母のは…申し訳ないけど、どうにもできないし」

夕子
「叫んであげることが全てではないと思います」
「そうかもしれないけど、見たら、もやもやして後悔しちゃうかもしれないさ」

夕子
「見なかったことを後悔するかもしれません」
「…ねえ」

夕子
「はい」

「さっという感じだった？」

夕子
「え？」

「その、うちの…母…？」

夕子
「ああ」

「あ、やっぱ、いい、いい」

玲子
「麦茶飲みます？」

夕子
「あ、すみません」

「ポットから麦茶をつぐ。」

夕子に渡す。

玲子
「美夜、朝日に飲みますか？」

朝日
「のむー」

美夜
「お願いします」

富沢
「ありがとうございます」

玲子、それぞれに渡す。

夕子
「飲む(あ…あまい」

「やっぱ麦ですか？」

夕子
「え、おばあちゃんちが、この味でした。」

「懐かしい味です」

夕子
「そう」

「これは、なんとも…奇妙な感じですね」

朝日
「私はいつもこれだからなあ」

玲子
「あんまり飲みすぎないでね」

美夜
「笑って飲む(…」

玲子
「どうかなさいました？」

美夜
「いえ、美味しいです、とっても」

押し入れから、酔っ払ってる真昼が出てくる。

真昼

私にもちようだいー」

玲子

もう、図々しいんだから(渡す)」

真昼

「飲む)美味しい。…懐かしいね」

玲子

えっ」

真昼

「この甘い麦茶、懐かしいよねえ。かよちゃんの味」

玲子

そうなの?」

真昼

玲子、お前も、この味、大好きだったでしょう」

玲子

覚えてない」

真昼

覚えてないかあ。でも私は覚えてるよ、

峰子

玲子が好きな味とか、食べ物とか」

真昼

はいはいはい、真昼ママ、もう寝ましょ寝ましょ」

真昼

玲子はねーちくわのカレーが好きなのよお。

峰子

変でしょ、変でしょ」

真昼

はいはい」

真昼

お金なかったからさあ、お肉の代わりにちくわとか

真昼

油揚げいれたやつ、ね、ね、玲子、

玲子

好きだったよね」

玲子

うん、好きだったよ」

真昼

今も好きー?(にっこり笑って、いびきをかいて寝る)」

玲子

「…:…:まったくもう」

こずえ

「…:(飲む)」

亮介

「…:(飲む)」

晴彦

そもそも、エンディングノートって

夕子

何を書くものなんですか?」

夕子

そうですね、履歴書みたいなことと、

恒夫

親族。関係者リスト、介護、治療の希望、資産、

晴彦

お葬式やお墓についての希望。それから、

恒夫

自分の好きなものとか、

亮介

それぞれへのメッセージ…:…:とかですね」

亮介

終活って言うんだよね」

亮介

「ふうん」

亮介

「お父さんのノートを取る)」

亮介

「…:…:見るの?」

亮介

親父、七回忌にさ、何を言いに来たんだろうなって」

亮介

「うん」

亮介

親父の好きなもの、改めて知っとくのもいいかもな」

こずえ

そうだね、お父さんの仏壇に置くのもありだね」

亮介、ノートを開く。

皆で覗きこむ。

亮介

改めて見る親父の字って、変な感じだな」

こずえ 好きな音楽、ビートルズ……って、これ外向き用の答えだわ」

亮介 ヴィ・ピーナッツ、西田佐知子、タイガース、やっぱしね

恒夫 あれ、ピンクレディーじゃないんだ」

晴彦 松田聖子かと思った」

亮介 親父だって、年を重ねてんだから、その時代によって違うだろう」

こずえ なんとなく覚えてたけど、なんか、いいね。あ、ほら、好きな食べ物、おいなりさん

恒夫 小学校の時の思い出は、竹馬づくり。……入え

晴彦 「ういっの書く時って、子供に戻るような感覚なのかな」

こずえ ちっしてっ」

晴彦 なんか、照れずに書いてる感じしない？」

こずえ 最後にかつこつけてもねえ」

亮介 当たり前だけどさ、親父にも小さい頃があつてさ」

こずえ そりゃ最初から大人なわけないんだし」

亮介 そうなんだよ、そうなんだけど、

こずえ こう改めて知るので、いいなってさ」

一同 「……」

晴彦 あのさ、そしたら、俺、……やっぱりさ」

亮介 「……」

こずえ 「……」

晴彦 見たい。お母さんのノート」

恒夫 うん……俺も……」

晴彦 けようちちゃん、こずえちゃんには悪いけど、俺、やっぱさ、自分を産んでくれた人の字とか……好きなものとか……知りたい」

恒夫 俺も……せめて、字だけでもいいから」

こずえ 「……」

晴彦 「ごめん。親父や、りようちゃん、こずえちゃんだけじゃ足りないとかじゃないんだ。ただ、たださ」

亮介 わかつてるよ」

こずえ そうだよな、2歳と0歳だもんねえ」

亮介 記憶つてさ、残つてた方がいいんだか、もともとなかつた方がいいんだか、忘れちゃった方がいいんだか……わかんないな」

こずえ うん、わかんないね」

晴彦 2人には辛い記憶なのかもしれないけど、俺と、つね兄は、記憶にすらないからさ、だから、せめて、この中に流れるものを

感じたって思うんだ」

こずえ 「……(頷く)」

亮介 「そうだな」

恒夫 「いい？」

亮介 「みんなで見よう」

晴彦、お母さんのノートを手取る。

開く。

食い入るように見る恒夫、晴彦。

晴彦 私の名前……家族……好きなもの……」

朝日 あ、あのお父さん」

亮介 どうした？」

朝日 先生が」

見ると、美夜が庭先に出ている。

亮介 おれ？大丈夫ですか？寒くはないと思うけど」

夕子 「……あ……」

こずえ 裸足？靴持ってきましたようか」

朝日 あのね、ちょっと、様子が変なの」

亮介 変？」

朝日 私の事、こずちゃんって」

こずえ 「……え？」

庭先から笑う美夜。

美夜 「こずちゃん、ほら、ひまわりが咲いたよ」

こずえ 「……」

亮介 「……」

晴彦、恒夫、ノートを見て顔を見合わせる。

玲子もノートを見て、庭先を見る。

美夜 けようちちゃんも、こつちおいで」

楽しそうに笑う美夜。

亮介 「……うそだろ」

こずえ お母さん……？」

音楽。

美夜、微笑みながらひまわりに水を上げ始める。

亮介 「どっついうことですか…？」

夕子 「お母様です」

亮介 「母は弁護士なんかじゃ…」

夕子 「はい、弁護士は私です。」

申し訳ありません。

依頼人がお母様、加代さまです」

晴彦 「…おかあさん？」

恒夫 「お母さん…」

亮介 「どっつして…？」

こずえ 「…騙したんですか…偽名まで使って…」

夕子 「違います。」

お母様はもう、すっかり記憶はないんです」

こずえ 「え…」

夕子 「私は加代さんがいた介護施設に出入りしてたんです。」

そこに、私の祖母もいたので。毎日のように、

加代さんから、あなたたちの話を聞きました。

でも加代さん、認知症がどんどん進行していつて、

記憶がどんどんなくなっていくって…」

加代さん、いつも言ってたんです。

どんなに痛くても辛くてもいいけど、

あの子たちのことだけは、忘れたくないなって。

自分の事を忘れてるのは、当然の報いだけど、

でも、自分は、あの子たちのことを忘れたくない、

死んでも、見守っていたいからって」

晴彦、庭先に出る。

しばらく無言で見つめる。

加代、晴彦を見て微笑む。

晴彦、ゆっくり近づく。

ジヨウロを手に取る。

晴彦 「…手伝うよ、お母さん」

美夜(加代) 「ありがとう」

晴彦、一緒にひまわりに水をあげる。

恒夫、その様子を見て、泣きくずれる。

玲子、恒夫を支える。

恒夫、泣きながら、庭先に出る。

恒夫 俺も……手伝っ」

美夜(加代) ありがとう。はるひ」。つねお。

ありがとうねえ」

加代、微笑む。

こずえ、ノートを手取る。

夕子 絶対、忘れたくない。そうは言っても、病気は残酷です。

このノートは私が勧めたんです。

でも、加代さんは、このノートを

あなたたちに見せたいから書いたわけじゃないです。

ただ、忘れたくないから。

あなたたちに逢える日が来ることだって考えてない。

でも記憶のカケラを残しておこうと、毎日、書いてました」

こずえ 「これ……字が……」

亮介 「……」

夕子 はい。最後の方は、なんて書いてあるのか読めないんですけど、

毎日、書いてました。加代さんの人生が色褪せていっても、

たぶん、書き遺すことだけは、ずっと、

したかったんだと思います」

亮介 「……」

夕子 すっかり、記憶を無くしてからの加代さんは、

まっさらでした。新しい記憶ばかりになるんです、

それで、私、考えたんです。

一日だけ、弁護士さんになってもらおうって。

私の代わりになってもらって、

この封筒を届けるときに一緒に行くって。

余計なことです。でも。

間接的でもいいから逢わせてあげたかった。

記憶がまだある頃の加代さんが、あなたたちの事を

話す時の哀しそうな笑顔が忘れられなくて。

すみません。これも、決して、言うつもりではなかったんです。

嫌な思いをさせるために考えたことではなかったんです」

朝日 「……お父さん」

亮介 うん」

朝日 おばあちゃんなんだ」

亮介 「……うん」

朝日 おばあちゃんって行っていいっ」

亮介 うん」

朝日、庭先に出る。

大喜びする加代。

こずえ 「ノートを抱きしめる」……………

亮介 「ありがとうございます(夕子に深くお辞儀をする)」「
ありがとうございます(同じく深くお辞儀をする)」

こずえ、庭先に出る。

美夜(加代) あ、こずちゃん来たー、あら……？

こずちゃんが2人？

朝日と共に笑う。

こずえ、泣きながら笑う。

玲子 名前は……

夕子 不思議です。

もう名前も、なんにも覚えてなかったのに。

どうしてでしょう？」

富沢 「……記憶がよびさまされたんだと思います。

感覚と知覚は動いていても、五感は鈍くなっていく。

でも、その中でも、味覚は、直接的な刺激だから……

「この甘い麦茶を飲んで、きつと、

深い記憶が、よびさまされたんだわ」

亮介 【麦茶をみる(そう)ですね、

思い出がなくなるわけじゃないですからね」

真昼 年齢でもさ、忘れていく(こ)とはいつぱいあるし、

ましてや、病気にはあらがえないもんね、

そうになったら、とんどん、忘れていつちやうだろうけど、

けど、いつだって、見えない奥の奥の方で、

子供たちの名前を呼んで、

きつとね、一緒に笑っているんだよ」

押し入れで泣く峰子と花園。

峰子 真昼ママ……

花園 「ママ——」

廊下で泣き崩れている撮影隊。

三笠 むう、今日の撮影はいいわね」

的場 朝「はんでもいいですー」

真美 えー、ていうか、撮るんですかー」

里中 撮るんですかー」

亮介 でもどうして、家がわかったんですか？」

夕子 「遺言書」これがありましたから」

亮介 「これは本物ですか？」

夕子 もちろん。

お父様はお母様のこと、知っていらしたから」

亮介 「え？」

夕子 介護施設に入る時に、職員から

連絡があったそうです。お母様、身寄りがなかったし。

それで、お父様、逢いに来てくださって。

お父様もエンディングノート、一緒に書いていたんですよ。

それから、自分がいつどうなってもって、

これ（封筒）を書かれて。

いつか。七回忌に、みなさんのところに届けてくれて

頼まれていたんです」

亮介 なんて七回忌……？

6年もほったらかすって」

夕子 うちの子たちは、みんなスローペースだから、

一遍にいろんなことがあったら、

頭がパンクしちゃうって。

だから自分が死んで、6年目くらいがちょうどいいかなって

笑ってました」

亮介 「……おやじ……泣く」

美夜（加代）

あらあら、りょうちゃん、泣いちゃったの。

大丈夫よー、だいじょうぶー」

加代の子守唄。

音楽が重なっていく。

明かり、ゆっくり落ちていく。

暗転。

【五場】ある夏の日 朝

明かりが入る。

居間に崩れて重なるように寝ている撮影隊と富沢。

机の横で死んだように寝ている恒夫と晴彦。

押し入れで寝ている峰子、花園、真昼。

アラームの音。

富沢、起き上がる。

富沢

「ああー！」

富沢、慌てて寝ている恒夫の方に行く。

富沢

先生、原稿、原稿、原稿……

(紙を手取る、読む)

書けてる書けてる書けてる！ー！」

傍らの、晴彦の紙も捨てる。
確認する。

富沢

描けてる！ーよし、よしよし、よしよし！

富沢、寝ている晴彦、恒夫をなでて、
撮影隊もなでる。撮影隊、起きる。

三笠

「朝〜？」

的場

「朝ですね」

真美

「撮影」

里中

「撮影……」

玲子、台所からやってくる。

玲子

「おはようございます」

富沢

「おはようございます」

撮影隊

「おはようございます」

富沢

「すみません、寝ちやっています、

もう出ます」

玲子

「あら、朝ごはん、食べていかれませんか？」

富沢

「これ(原稿)、印刷所に回します。

(時計を見て)良かった、間にあります」

玲子

「迷惑おかけしてすみません」

富沢

「えいえいえ、ありがとうございます……」

これ。ほかまだんち」……お疲れ様でした」
お疲れ様でした」

玲子
富沢

あ！お父様の七回忌……
お線香だけでも！（奥の部屋に行く）」

仏壇の「カ」の音。

バタバタと奥の部屋から出てくる富沢。

富沢

「うってまじりますー！」

玲子

「うってまじりますー！」

真美

ねー、三笠さん、一世一代のチャンスって逃げちゃったんですかあ？！」

三笠

だいたいぶがー！逃げてない！逃がしてないと思えばいいの。

真美

ほら、行くわよー！」

三笠

「カ」

三笠

挨拶」

撮影隊、奥の部屋に向かう。

仏壇の「カ」の音。

峰子起きる。

峰子

やだ、まもちゃん、もうこんな時間！」

花園

あ、ああ、ああ、峰子だあ！」

真昼

なにより、まだ夜中じゃない」

峰子

真昼ママには夜中だけどね、

花園

世の中は、朝なんです」

花園

よし、行くか、すみませくん、お邪魔しました」

玲子、台所から来る。

玲子

え、もう？朝ごはん出来てますけど」

花園

お邪魔しました」

峰子

あのさ、いろいろごめんね、お騒がせしちゃって」

玲子

ほんとですよ」

峰子

でも、ほら良かったよね、結果オーライ」

花園

うんうん」

真昼

あんたたちが言うな」

峰子

じゃあ」

2人、出て行ったかと思うと、直ぐに戻ってきて、奥の部屋に向かう。

仏壇の「カ」の音。

またバタバタと出かけていく。

玲子 朝ごはん食べる？」

真昼 「いっ。」

玲子 「うん、あっちにあるよ」

真昼 わーい(押し入れから出る)「

真昼、大喜びしながら台所に行く。

玲子、笑う。

居間を片づけ始める。

恒夫、ゆっくり起き上がる。

玲子 あ、おはよ。朝ごはん出来てるわよ」

恒夫、机の上の離婚届を玲子につきつける。

玲子、笑う。

玲子 なあに？離婚してくれるの？」

恒夫 絶対やだ」

恒夫、離婚届を破く。

玲子、しまつてあつた離婚届をたくさん出す。

恒夫、それを片っ端から破りまくる。

2人、笑いあう。遊んでるかのよう破りまくる。

晴彦、起きる。

晴彦 何してんの？」

恒夫 「ここから(破きながら)人生を見つめてるんだ」

晴彦 何それ、流行ってるの？」

玲子 はるちゃん、朝ごはんあるけど」

晴彦 あ、食べる食べる」

恒夫 俺も」

玲子 ふうん、美味しく食べてくれるのかなあ」

恒夫 食べる食べる」

晴彦 俺も俺も」

玲子、笑う。

玲子　もうじき、お坊さんいらつしやるから急いでね

2人、はいと言いながら台所に向かう。

玲子、片づける。

「こずえが台所からやってくる。

「こずえ　手伝うよ」

玲子　「あ、ありがとう」

2人で片づける。

「こずえ　あのさ」

玲子　「ん？」

「こずえ　めっちゃ美味しかった。いなりずし」

玲子　「良かった」

「こずえ　思い出したんだけど、あの、いなりずしき、

お母さんの味だった」

玲子　「ほんと？」

「こずえ　うん。玲ちゃんママ、きつと、うちのお母さんに

教わったのかも」

玲子　「そっか、そうかも」

玲子、嬉しそうに笑う。

しっかりと支度をした夕子と加代がやってくる。

美夜(加代)　「おはようございます」

夕子　「おはようございます」

「こずえ　おはようございます」

玲子　「おはようございます」

美夜(加代)　「いいお天気で良かったですねえ」

「こずえ　眠れました？」

美夜　「ええ、ぐっすり。ありがとうございます」

「こずえ　笑って良かった」

夕子　「お坊さんがいらつしやる前に、

(封筒)お手紙を開けさせていただけでも

よろしいですか？」

「こずえ　あ、お願いします」

玲子　「呟んできます」

玲子、台所に呼びに行く。

美夜(加代)

ひまわり、いいわねえ、ひまわり。

花言葉はあなたを見つめてる」

こずえ

「うん」

亮介、朝日、

晴彦、恒夫、支度を済ませてやってくる。

真昼、覗きこむ。

晴彦・恒夫

「おはようございます」

美夜(加代)

「おはようございます」

亮介

「眠れました?」

美夜(加代)

「ええ、ぐっすり。ありがとうございます」

亮介

「良かった」

玲子、美夜のために、朝ごはんをもってくる。

玲子

「座りましょう。お母ちゃんもうち入んなよ」

真昼

「いっの。」

玲子

「はい、こちら朝ごはんです、どうぞ」

美夜(加代)

「まあ、いなりずし? 私、大好きなのよ」

玲子

「ほんとですか?良かった」

美夜、嬉しそうに食べる。

みんなが加代をじっと見ている。

美夜(加代)

「……美味しい。美味しいねえ」

全員、笑いあう。

加代、食べながら

美夜(加代)

「あ、そうだ、次の運動会は、やっぱり、

おいなりさんがいいかな、ねえ」

「うん、おいなりさんがいいな」

晴彦

「そうだね」

こずえ

「うん」

恒夫

「うん」

美夜(加代)

「ふふ、美味しいねえ。幸せだねえ」

加代、食べ終わると、縁側に立つ。

美夜(加代)

今日もいいお天気でよかったわねえ」

全員、笑いあう。

夕子

では、こちら、開けますね」

こずえ

お願いします」

夕子

読みます」

亮介

お願いします」

夕子

「おはよう、諸君。

これを夕子さんに読んでもらってる頃は、俺が死んでから6年後だな。

みんな、元気か？

俺は元気だ。あの世でな。

人生は不思議なものだな。

どんなに憎んでも

辛く、哀しく、しんどい目にあっても。

こうして、もうすぐ、人生がおわるのか・
と、思うと、いろんなことが、笑えてくる。

今日、お母さんにあった。

お母さん、俺のことは忘れていた。

でもな、お前たち、全員のことだけは
覚えてるぞ。

お父さんは、残りの人生、お前らに秘密を作った。

ごめんな。

お母さんを独り占めしたかったんだ。

死んでる俺が言うのもなんだが。

愛する子供たち。一生の願いがある。

きつとお母さんはもう全部を忘れてるかもしれない。

でも、もしも、お母さんがまだ、生きていたら。

いろいろ想うことはあるだろうが、
ただ。ただ。

逢いにいつてやってください。

よろしくおねがいます。

父より」

庭先に出ていた美夜が笑う。

美夜（加代） ひまわり、いいわねえ、ひまわり。
ねえ、伸治さん。「うち来てくださいますよ」

亮介に向かってほほ笑む。

こずえ お父さん……」

夕子 「道伸」

こずえ 道伸？」

夕子 「道伸。

エンディングノートみたか？

書くのは、結構、楽しかったぞ。

葬式には間に合っていないと思うが、

お父さんの好きな歌。頼む」

こずえ

何それ」

玲子 お父さんらしいですね」

玄関のチャイムの音。

玲子 あ、お坊さんですよ、はい。

やだ、奥の部屋、掃除してない」

撮影隊が顔を出す。

撮影隊 やっときましたー！」

三笠 あと、これ（父）のラジカセを出す（

晴彦 あ

晴彦、三笠からラジカセを受け取り、

懐かしそうにカセットテープをながめ、

再生ボタンを押す。

音楽。

亮介、恒夫、晴彦、こずえ、朝日、踊りだす。

撮影隊、撮影をしながら、はけていく。

一同、笑いあいながら、やがて、それが日常の風景に移っていく。

笑い踊る面々の中に、秋の装いのたちが現れる。

その登場人物たちの出入りと共に、細かい美術転換もしていく。
夏の小道具、ヒマワリが片付かれていく。
ヒマワリの代わりにススキが置かれる。
衣装も夏から秋に変わっていく。

おなががちよつと大きくなった峰子、
花園と一緒にやってくる。

富沢、原稿を取りにやってくる。
真昼やってくる。

夕子、加代がやってくる。など、人が出たり入ったり。

やがて加代だけになる。

辺りを見回し、茶の間に座る。

音楽カットアウト。

【六場】ある秋の日。夜更け。

秋の虫の声。

茶の間に座っている加代。

既に心はどこか遠くにいつてしまっているが、
にににこと微笑んでいる。

段ボール箱を持って、やってくる、玲子。

加代のそばに座って段ボール箱を開ける。

すっかり秋ですねえ」

「ただ、微笑む」

夕子さんから荷物が届きましたよ、

施設にお母さんの荷物がちよつと残ってたんですって」

「微笑む」

なんたる、冬物かな？あと、手紙も入ってる」

玲子、手紙を読みながら、

玲子

あ、夕子さん、今度、結婚するそうですよ」

「ずえが台所からやってくる。

こずえ　ねえねえ。れいちゃん(小皿をもって)、味見してくんない?」
玲子　えー、こんな遅い時間に、何つくってるの?」
こずえ　「なりずし。このままおあげさん煮ていいかな」
玲子　「うん、美味しい」
こずえ　「良かった。お母さんも食べられるかなあ」

こずえ、台所に戻ろうとする。

玲子　あ、こずえちゃん」
こずえ　「ん?」

玲子　「これ、施設に残ってたお母さんの荷物だって」
こずえ　「まだ、あったんだ」

こずえ、段ボールの中をみる。
中に入っているマフラーを取り出す。

こずえ　「……これ……」
玲子　「どうかした?」

こずえ　「これ、小学校の時、私が創ったマフラーもどき。
ひどいな、目がいつぱい飛んでる、恥ずかしい」
玲子　「大事に取っといたんだね」

いつの間にか眠っている加代。

こずえ、微笑んで、マフラーを加代にかけてあげる。
2人、笑いあう。

こずえ　「じゃ、続きしてくる」
玲子　「楽しみにしてる」

秋の虫の声。

玲子、段ボール箱を押し入れにかたづけ、
手紙の返事を書くことと文机に向かう。

玲子、手紙をかき始め、想いを馳せる。
次第に眠くなり、机に伏せて眠る。

加代、ふと、目を覚まし、
マフラーをみて、嬉しそうに笑う。

寝ている玲子を見て、押し入れから毛布を出し、
玲子にかけてあげる。

加代、微笑みながら、縁側に座る。
庭をみつめてから空を見上げ、マフラーを抱きしめる。

音楽。

【ヒロローグ】ある秋の日。

縁側に座ってる加代。

寝ている玲子。

玲子が目を覚ます。

辺りを見回し、縁側の加代の後ろ姿を見て微笑む。

傍らの机の上を片づけながら

加代に何か話しかける。

応えがない加代に近づく。

玲子、しばらく加代を見つめているが、やがてそれに気付く。
誰かをよぶ。

亮介と朝日が奥の部屋からくる。

朝日、加代にしがみつく。

玲子、電話をかける。

晴彦とこずえがやってくる。

晴彦は加代にかけより、声をかけ揺り動かす。

恒夫が入ってきて、それを見て立ちすくむ。
手にしていた紙を見つめながら崩れる。

真昼が来る。

玲子、真昼に抱きつく。

明かり薄明かりになる。

全員、ストップモーション。

加代、ゆっくり立ちあがる。

辺りを見回す。

ひとりひとりを見つめ微笑む。

庭のススキの向こう側に誰かがいる様子。

加代、それを見つめ微笑む。

そして、手を伸ばし、ゆっくりとはけていく。

ストップした面々がスローモーションで

ゆっくり動きます。

加代のいた場所に思いをはせながら、空を見上げる。

全員、はけていく。

エンディングノートだけが部屋に残る。

明かり、ゆっくり落ちていく。

おしま。

ありがとうを言いました。